

# Rintaro Akamatsu Piano Collection Vol.4

## Les prières

西尾 洋

### 作品について

第2次世界大戦後、前衛的な現代音楽の嵐が吹き荒れるなかで、それとは別の道を歩む動きが生まれてきた。たとえば微細な変化を含む反復を基本としたミニマル音楽であり、あるいは宗教的、神秘的な精神世界を描いた音楽などである。エストニア人のアルヴォ・ペルト（1935-）の《アリヌーシカの癒しに基づく変奏曲》（1977）もそのひとつ。作曲者の娘アリヌーシカの、盲腸手術後の平癒を祈って書かれた。素朴な鐘の響きを繰り返しながら、短調から長調へとその色彩を変化させていく。この作品が書かれた時代の社会情勢や音楽界のうねりなどを想像しながら聴くと興味深い。

《蓮の花》（1840）はハインリヒ・ハイネ（1797-1856）の詩にロベルト・シューマン（1810-56）が作曲した歌曲を、作曲者の妻クララがピアノ独奏用に編曲したもの。「蓮の花は太陽の照る間は光を恐れてこうべを垂れて夜を待ち、夜になれば月明りが蓮の花をその光によって目覚めさせる。蓮は咲き、光り輝き、無言で空に向かって聳え立ち、香りを放ち、泣き震える。愛とその痛みのために」というのが詩の大意である。この作品が含まれている歌曲集《ミルテの花》が妻となるクララに捧げられたものであることを考えると、ハイネの詩をシューマンがどのように捉え、読み替えたかを想像するのは難しくない。さらに、楽譜を手にしてその音の配列を深く読むと、いたるところにシューマンからクララへのメッセージが織り込まれていることに気づく。ClaraのCはドに、laはラに置き換えられ、愛の印として鳴り響く。

フランスの作曲家、ガブリエル・フォーレ（1845-1924）の《即興》作品84-5（1901）はまさにお祈り風の息の長い旋律と、半音階的に移ろう和声進行が特徴。リヒャルト・ヴァーグナーの無限旋律に代表される途切れない音楽と、それを可能にする半音階的な転調技法は、お膝元のドイツ語圏のみならず、文化的に隔たりのあるフランス語圏の作曲家たちにも多大な影響を与えた。フォーレ作品の多くに共通する前述の特徴はヴァーグナー

譲りであるが、それに加えて、古典的な和声法に基づきながらもそこから浮遊していく独特の音遣いや、オルガニストならではの響きの安定感がフォーレらしさといえる。

グスタフ・マーラー（1860-1911）の《トランペットが美しく鳴り響くところ》は、1892年から98年にかけて、『少年の不思議な角笛』と題された詩集に作曲されたもの的一篇である。歌詞は、「暁に戸を叩く音がするので開けると愛する君が立っていた。少女は彼を迎え入れた。少女は泣いた。泣かないでおくれ、きみはずっとぼくのもの。そしてぼくは遠くへ戦争に行く。

（要約）と語ったあと、次のように締めくくる。「トランペットが美しく鳴り響くところ、そこにはぼくの家、緑の芝でできた家があるのさ

。トランペットは軍隊の象徴である。ピアノ独奏への編曲は赤松自身による。

このアルバムに含まれる作曲家はみな異端を歩んでいたが、その極みがエリック・サティ（1866-1925）といえる。神秘主義に傾倒し、同時代の音楽からまったくかけ離れた作品を書いた。《グノシエンヌ》第4番（1891）は、一貫して続く分散和音のうえで、行き先の定まらない異国風の旋律が浮かんでは沈み、沈んでは浮かびくる。脈絡のなさそうな叫びや嘆きが、交わることなく淡々と流れる。短調のようでありながらそこから外れた音があり、時折長三和音が仄白く辺りを照らす。そして最後の、まったく無関係な和音による何とも唐突な終わり。フォーレ作品より10年前、ペルト作品より86年も早く書かれており、このアルバムのなかでは2番目に古い作品である。

フォーレの弟子であり、管弦楽法の魔術師として右に出るものがないモーリス・ラヴェル（1875-1937）は、歌曲もたくさん書き残している。《カディッシュ》（1914）とは聖なるものを意味し、栄光の王を讃える歌詞が、一本の旋律で朗々と歌われる。祈りとは、心を一つの線にして強く長く紡ぎ続けるものだということを思い起こさせる。ピアノ独奏版への編曲はリストの弟子、アレクサンドル・ジロティによる。